

石川県立美術館だより

平成14年3月1日発行 第221号



兔福寿草図 岸駒筆 天明2年(1782) 当館蔵

目次

春の優品展（前田育徳会展示室）.....2	美術館小史・余話（20）.....5
春の優品展（第2展示室）.....2	企画展示室.....6
常設展示室 主な展示作品、図書閲覧室NOW...3	企画展TOPIC、三月の行事案内他.....7
講演会記録（花と緑の名品展）.....4	所蔵品紹介、新年度友の会会員募集.....8
展覧会回顧（平成十三年度開催の展覧会1）...5	

ホームページアドレス <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

春の優品展

2月23日(土)~3月28日(木)

今回の特集はNHK大河ドラマ「利家とまつ」の放映に直接協賛するものではありませんが、ドラマの進行にもなつて次第に明らかになってくると思われる、前田家の特質としての「武と文」を念頭に置いて絵画を中心に作品を構成してみました。

最初にご紹介したいのは、廣渡雪山筆の「鍾馗図」です。周知のように鍾馗は病床にあつた玄宗皇帝の夢に現れた悪鬼を退治し、それによって皇帝の病が治つたという故事から、中国では悪鬼を退け、魔を除く神として信仰されて来ました。また通常右手に剣を持つ勇猛な姿で表現されることから、特に室町時代以降、武家が武運長久を願う対象としてクローズアップされました。前田利家が幟や陣羽織に鍾馗をあしらつたことから、前田家にとつて鍾馗が特別な意味を持つものであつたことは容易に想像できます。今回展示する「鍾馗図」の筆者である雪山は、一五三〇年頃に活躍したと推定されています。号の「雪」の字は雪舟あるいは雪村に由来すると考えることができます。

次にご紹介したいのは「源氏五十四帖画卷」です。源氏物語の画像といえば、誰もが国宝の「源氏物語絵巻」を連想するように、その画像表現は約八百年の歳月を経て、「源氏絵」という絵画のジャンルを確立しました。今回展示する作品で注目されるのは、画面に人物が一切登場しないことです。こうした表現は、「源氏絵」でしばしば見られるもので、主人公が不在ということから「留守絵」と通称されています。そこで描かれているのが、源氏物語のどの帖なのかを鑑賞のポイントとなります。描かれているのは朝顔や夕顔など自明のものから、高度な知識を前提とするものなど様々ですが、これらはすべて文字や香道、そしてその他の工芸意匠にも関連してくるものであり、大名家の一般教養として代々重視されてきたことがうかがえます。

暦では、立春から立夏の前日までを春とし、二十四節気をもとに、初春(立春から啓蟄)、仲春(啓蟄から清明)、晩春(清明から立夏)に区分されています。この期間は、さしずめ仲春ということ、寒暖をくり返しながら、野山はにわかには春めいて、梅に遅れをとつていた春の花々が、いつせいに咲き始める頃といわれています。

今回は、収蔵品の中から、春を主にテーマとした、屏風を中心に展示してみました。

主な出品作品を紹介すると、まず石川県指定文化財の「源氏物語図」六曲一双の中屏風。これは古くは「御所絵」と称されてきましたけれど、描かれている内容は、源氏物語五十四帖の内、六帖の場面《桐壺》《紅葉賀》《遷都》《胡蝶》《若紫》《絵合》を金箔押し雲形で空間を区切り、物語の順序と関係なく配置したものです。筆者は岩佐派の始祖又兵衛と伝えられていますが、人物の表現には岩佐派の特徴がよくうかがえます。六場面の中で春の季節を表したのは《胡蝶》と《若紫》があげられます。

「兎福寿草図」一幅(表紙参照)。これは江戸後期、京都画壇で一世を風靡した岸駒が、「蘭齋」と称していた頃の、最も初期のもので、福寿草の咲いた岩場で遊ぶ三羽の兎を写実的に描いたもので、記された落款から、中国明時代の花鳥画家呂紀の筆法に倣った旨がうかがえます。福寿は幸福で長命を意味し、正月用の花として広く栽培されていますが、自生のものは早春の頃、葉に先立つて黄色い花をつけます。

このほか、伊年印の「四季草花図」六曲一双、桃山時代に流行した春の景物画「柳橋水車図」を江戸時代に入つて水車の部分を範として描いた旧山川コレクシヨンの「水車図」二曲一隻、江戸後期の東西を代表する文人画家、江戸の谷文晁筆「白梅図」六曲一双、京都四条派の松村呉春筆「田舎清閑図」二曲一隻、いずれも江戸の絵画を特色づける作品です。



県指定文化財 源氏物語図(部分)
「胡蝶」 伝岩佐又兵衛

常設展示室 第2展示室)

特集

春の優品展

2月23日(土)~3月28日(木)

常設展示室

主な展示作品

2月23日(土)~3月28日(木)

● = 国宝 ○ = 重要文化財 □ = 重要美術品
 △ = 石川県指定文化財



1982年私 鴨居 玲



色絵海老藻文平鉢 古九谷

特集 春の優品展(今月は全室統一テーマです。)

前田育徳会展示室

- 寿老・鶴図 佐々木泉景
- 流鏑馬図 住吉廣長
- 犬追物図 住吉廣行
- 笠懸図 住吉廣行
- 騎射図 住吉廣行

第1展示室

- 色絵雄雉香炉 野々村仁清
- 色絵雌雄香炉 野々村仁清
- 源氏物語図 野々村仁清
- 水車図 伝岩佐又兵衛
- 兎福寿草図 岸駒
- 古九谷

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

- 油彩画 鴨居 玲
- 1982年私 高光一也
- カサブランカ 宮本三郎
- 裸女達に捧ぐ
- 彫塑・造形 木戸 修
- スパイラルリング 3 吉田 隆
- 風景の中の豎琴

第5展示室(工芸)

- 構成の美花器 二代浅蔵五十吉
- 迦陵頻伽宝相華文時絵経箱 松田権六
- 神代標造金銀縮れ線象嵌棚 氷見晃堂

第6展示室(日本画・書)

- 御水送り神事 黒田櫻の園
- 寂光 浜出青松
- 書 鈴木翠軒
- 行觴 手島右卿
- 飛觴
- 観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		



行觴 鈴木翠軒



迦陵頻伽宝相華文時絵経箱 松田権六



スパイラルリング#3 木戸 修

図書閲覧室NOW

新着図書紹介

最近、刊行される美術関係の図書をみていくと、最新の研究成果をもとに、わかりやすくまとめられた美術史の入門書や作品鑑賞の手引き書、技法書など、人々に興味をいだかせ、また理解を助けるのに役立つと思われるものが目立ちます。今回ご紹介する「世界名画の謎」全二巻(ゆまに書房刊)もこうした種類のものです。

体裁はB4判オールカラーで《作家編》《作品編》とに分かれています。内容は、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ボッティチエリといったルネサンスの巨匠から、セザンヌ、ゴッホ、ピカソら近代の大家まで、西欧の著名な約五十作家、およびその主要作品が取り上げられています。基本的には、見開き二頁に一作家を取り上げ、その作品を中央に大きく配して、周囲にさまざまな角度からの解説(時代背景や様式、画題の意味、技法など)を付けることで、図版を鑑賞しながら、絵の意味を読み解いていくという構成になっているわけです。どの頁から見ても楽しめる、美術をより身近に感ずることが出来るのではないのでしょうか。

この図書は、もともとイギリスで一九九八年に刊行されたもので、その日本語版にあたります。ちなみに、著者ロバート・カミングは、ケンブリッジ大学で法律と美術史を学び、主に美術教育の分野で活躍しており、その著書は、いくつか国際的な賞を受賞しているとのこと。

*開室時間は午前九時三十分~午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません

講演会記録

日本人の自然観

近世絵画の花鳥風月をめくって



講師 冷泉為人氏
れいぜいたみひ
 (池坊短期大学学長・
 冷泉家二十五代当主)

日本人の自然観について清少納言の『枕草子』には、日本人の基本的な美意識が示されております。「春はあけぼの・・・夏は夜・・・秋は夕暮・・・冬はつとめて・・・」とあるように、先ず最初に四季の美しさがとりあげられ、次に四季の時間的な設定をして、さらには十二月折々に趣があると言っています。平安時代には、すでにこのような意識感覚を持っていたと言ったことがわかるのです。

それでは日本人は、自然というものをどのように考えていたかということですが、自然と一体となって、自然を理解していたと言われています。それに対して西洋人は、自然と人間が対峙していると言われます。自然と対峙すると、そこに客観的なものの見方、論理が出てきます。それに対して、自然と人間が一体ということとは、きわめて主観的であり、情緒的です。そういう事がこの『枕草子』につなががえます。

日本の絵画における雪月花を理解頂くために、中国の絵画と比較しながら話を進めますが、雪月花の花といえは桜です。中国で花といえは、梅・桃を絵画化する事が多く、桜を描くことは殆どありません。奈良時代には、梅が非常に和歌にも詠まれていました。百花の魁、寒風霜月のなか清楚な花を咲かせ、馥郁たる香氣を発するため、文人画などでは「歳寒三友」、「四君子」として必ず登場します。高士・逸士・隠士を象徴する静謐なものとして『万葉集』に多く登場します。『古今集』になりますと、春の象徴は桜に変わって

るわけです。そして平安時代の後期には、国風文化が興ってきます。漢字がかなに変化するということですが、中国のものを日本風に展開する、これを「変容」といっていいと思うのですが、形を変えるということが興ってきます。近年注目をしているのが、この「変容」という言葉です。われわれ日本人は形を日本風に合うように変えていくということが、非常に優れた民族ではないかと思われまます。時代が変わっていく時に、外からの影響を日本風に上手く展開させているということが言えるのではないのでしょうか。この梅から桜への変化だけをとりあげても、日本人の自然観、あるいは心性、あるいは美的感覚といましようか、そういうものを十分にうかがえると思います。

次に雪ですが、中国の雪は、文字通り雪を表現しています。つまり雪以外の何も表現していないのです。中国という国は論理の国です。漢字というものはまさに論理です。山水画という言葉がありますが、文字通りこれは「山」と「水」を描いた絵だということ、これは論理以外の何もでもないわけで、雪の表現にも言えることです。時間・空間は悠久なる時空間となって、深遠なもの、冷徹なものが表現され、そういう雪表現になるということですが。しかし日本の雪は冬の景物として描かれます。初冬・盛冬・晩冬・初春の雪として描かれ、初雪・淡雪・吹雪・なごり雪・残雪というような言葉があるように、日本の雪表現は、雪の白さ、輝き、眩しさ、冷たさなど、雪の美しさ、情緒、雰囲気などを絵画化しているといえます。中国は論理的といいますが、言葉を変えれば写実的、真実の実を描いているのです。それに対して日本の場合には、文字通り、情緒・雰囲気などの「景気」を表現しているということですが。これが日本人の心を表しているのではないかと思います。

月についても同じ事が言えると思いますが、中国の月表現は、満月、三日月など折々の月を写実的に論理的に描きます。それに対して日本の絵では、三日月や雲間の月、朧月などを描いて、ほとんど満月というものは描きません。ここに日本人の特質があるのではな

いかと思います。部分から全体を、不完全なものから完全なものを見ようとするとところがあるようです。たとえば「冬来たりなば、春遠からじ」、「梅一輪、一輪ほどのあたたかさ」と言いますが、冬が来たら、春を感じる、あるいは梅が一輪一輪咲くことに暖かさを感じるというように、非常に細やかであると同時に、時の動きのなかで、そのものを見ようとします。これは、われわれが季節の循環、四季というものを解っているから、冬が来たら、春はもうすぐそこに来ていることが解っているわけです。結局、循環するということとは、仏教思想の輪廻とも関わってくるのではないかと思います。部分から全体、不完全なものから完全なもの、もつと極端なところでは、無から有、何も無いところから有るものを見ようとするとところが日本人にはあるのではないのでしょうか。こうしたことについて『無名抄』で鴨長明が、限りなくおしはかる(推量)ことが大切なのではないかとこのことを言っています。また「徒然草」にも「花は盛りには、月は限なきをのみ見るものかは・・・。」と書いています。無から有を見ようとすると、非常に極端なものの見方が窺えるかと思えます。また世阿弥は「秘すれば花」(花は隠すべき)、また芭蕉は「くまぐままでいひつくすものにあらず」、「いひおほせて何かある」(誰もか納得する工キスというものを隠しておかなければならない)と書いています。それは、余情・余白・余韻というものにつながっていくと思えます。茶道では、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮」や「花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや」が侘茶の精神です。これは限りなく推し量るといって日本人の考え方の象徴です。

日本人の自然観や対象の捉え方、日本人の心というもの、まさにこの日本の風土から育まれたものであると言つことではないのでしょうか。

(平成十三年九月三十日に特別展「花と緑の名品展 自然との対話」にちなんで行われた講演会の内容を、当館の責任でまとめたものです。)



平成三十三年度開催の「花と装飾」

今年度も当館では、一階の企画展示室や二階の常設展示室で数多くの展示会が開催されました。企画展示室では、今後三月末までに開催予定のものを含めまして三十一回を数えます。常設展示室で行った特別陳列や特集は三十回となり、一階と二階を合計すると六十一回といふ多くを数えます。それらの中からいくつかの展示会を振り返ってみたいと思います。

「彫刻家 吉田三郎展」は、当館主催の企画展示室での彫刻展としては、初めてのものでした。明治二十二年金沢に生まれ、石川県立工業学校（現石川県立工業高校）で板谷波山とめぐり会い彫刻を始め、東京美術学校在学中の四十三年に文展初入選を果たし、以後文展、帝展、日展で活躍し日本芸術院会員となった吉田三郎の回顧展でした。師である板谷波山、朝倉文夫をはじめ、東京美術学校同級生の北村西望、建島大夢、同郷の都賀田勇馬、弟子の木村珪一、松田尚之、堀義雄、伊藤五百亀、中村晋也の作品を含めての展示で、吉田の作品は、戦災により戦前の作品が極めて少ないため、戦後の作品が中心となりましたが、一貫して男性像を作り続けてきた吉田三郎ならではの、独自の作風を楽しんでもらえました。また、ご子



息の吉田渉氏による講演会「父・吉田三郎を語る」では、彫刻家のみならず、室生犀星をはじめとする田端文士村の人たちとの交遊について興味深い話を拝聴することができました。

「終わりなき記憶の旅 デ・キリコ展」は、二十世紀イタリア美術の中でも、最もなじみ深い作家の一人であり、マグリット、ダリ、デルヴォーなどのシュルレアリスム絵画の成立に影響を与えるなど、形而上絵画の創始者となったジョルジョ・デ・キリコの初期から晩年までの作品で構成され、謎に満ちたその軌跡をたどる展示であり、愛好者の話題を呼びました。

「生誕二四〇年 北斎展」は、最近再発見された青年期の作品、百年ぶりに再発見された摺物「冷水売り」を含む肉筆画、画稿、錦絵、摺物、絵巻、絵本、読本など約二百点で構成され、実に多彩で魅力的な葛飾北斎の画業を概観できる展示であり、入場者を魅了しました。

「花と装飾 ナンシー派展」は、第十八回全国都市緑化いしかわフェアに協賛して開催した展示会でした。十九世紀末から二十世紀初めにかけて、ヨーロッパを席巻した芸術様式アール・ヌーヴォーのフランスにおけるパリと並ぶ中心地がナンシーでしたので、この地で活躍したエミール・ガレを中心とする芸術家たちはナンシー派と呼ばれました。本展では、ナンシー派のガラス工芸、家具、デザインのほか、建築設計案や当時の雰囲気を与える写真などを加え、ナンシーに花開いた総合芸術を紹介しました。また、ナンシー派の日本人・高島北海を紹介することにより、ナンシー派におけるジャポニズムの展開についても紹介しました。

これまで、ガラス工芸、デザインなどの紹介が多かったアール・ヌーヴォーの展示会ですが、本展では、大型の家具、調度、建築設計案などを展示し、建築と工芸の新様式としてのアール・ヌーヴォーの紹介がなされた展示でした。

（南 俊英 学芸第一課長）

美術館小史・余話 20

嶋崎 丞 当館館長

ダイレクトメール方式の葉書送付による広報活動の効果は大きかった。あつという間に広がりを見せ、多くの方々から申し込みを受けるようになり、六百名でスタートした「美術館愛好会」の会員数も、一年半を経過した昭和四十三年の夏頃には、千名を越えるまでになった。これを機会に、広報紙をぜひ刊行しようということになる。

その頃美術館では、本館の施設の不備を補う意味で別館を建設中であった。会員が千名を越えた九月に、度落成開館、しかも当該年が開館十周年にも当たり、これらを記念する意味でも、広報紙刊行の意義が大いにあるというわけである。

名称については種々検討されたが、誰にでもよくわかるということで、「石川県美術館だより」とし、B5判四頁、年四回発行の季刊方式でいくことに決定した。創刊号は昭和四十四年二月十日付で刊行されたが、今あらためてそれを手にしてみると、今日の状況とは全く異なり、写真を含めて紙面は全くの白黒で、まことに貧弱そのものである。しかし、当時は広報紙をやつと持つことができたうれしさで一杯であった。表紙を兼ねた一頁目に何を掲載するかということも議論になった。いわゆる行政の広報紙ならば、一般的にトップの人の挨拶文を載せている場合が多いが、美術館の広報紙であり、また別館の開館ということが刊行の一つの切っ掛けでもあったので、まずそれをトップに載せた。併せて収蔵品の第一である、国宝「色絵



「石川県美術館だより」創刊号
（昭和44年2月20日発行）

「雑香炉」を掲載して一面を飾ることにした。多くの県民の方からは大変な好評のお便りを頂き、刊行してよかったと思つた。

広報活動の開始（一）

企画展示室

第24回一創会展金沢展

三月二日(土)～六日(水)

(第8・9展示室)

新春、東京都美術館で開催された本展の中から、基本作品、受賞作品及び石川県内作家の力作約百二十点を選び、第24回展の巡回展を開催いたします。

何ものにも制約されない自由な作品群をご鑑賞下さい。
主な出品作家

横塚 繁 今村昭寛 寺西武久 西山英二
平口幸枝 蓮井廣幸 吉川千恵 梅沢隼行
虎井 修 松本陽子

入場料 一般五〇〇円 大高生四〇〇円

中学生以下無料(団体料金は各一〇〇円引)

当館友の会員は会員証提示により団体料金

連絡先 小松市二ツ梨町ク 一九 一五 寺西武久

☎〇七六一 四四 四三三五

第25回伝統九谷焼工芸展

三月二日(土)～十日(日)

(第7展示室)

昭和五十一年に郷土が誇る九谷焼の技術保存と発展向上を図るため、九谷焼技術保存会が石川県無形文化財として指定されましたが、本展はその技術保存会の事業の一つとして毎年行われている公募展で、今回は二十五回目です。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

入場料 一般三五〇円 大高生三〇〇円

中小生二五〇円 (団体は各五〇円引)

当館友の会員は会員証提示により団体料金

連絡先 能美郡寺井町寺井三三五 石川県九谷会館

☎〇七六一 五七 〇一二五

第11回石川独立DO展

三月九日(土)～十三日(水)

(第8・9展示室)

石川独立の前身は、昭和五十四年に県内在住の独立

展出品者を中心にDO展として発足しました。日本のフォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

出品作家 上田英子 大泉佳広 金子顯司

喜多村徹雄 京岡英樹 桑野幾子 指江昌克

佐藤仁敬 澤 秀和 田井 淳 多見谷恭子

中矢 篤 南城 守 西又浩一 堀 一浩

前田さなみ 三浦賢治 水野雅己 山田裕之

招待作家 芝田米三 絹谷幸二

入場無料

連絡先 金沢市城南二 八 一六 堀 一浩

☎〇七六一 二三一 九〇九一

第20回石川県写真家協会展

三月十三日(水)～十八日(月)

(第7展示室)

二十一世紀を迎え、今回写真家協会といたしましても二十回を数え、「20回記念展」を行います。これまでの時代を振り返り、またこれからの未来に向けての思いをいろいろな形の表現で、写真においてアピールする展示にしたいと思っております。写真を職とする者各人を感じていただきたいと思えます。

入場無料

連絡先 金沢市駅西新町三 三 三一 橋本良一

☎〇七六一 二三一 二六五六

01 玄土社書展

三月十六日(土)～十八日(月)

(第8・9展示室)

玄土社の一年間の活動を集約する玄土社書展は、01年中に発表した作品の中から、抽象的表現の創作品とその対極にある古典臨(りん)作品を展示いたします。出品者は東京、埼玉、愛知、富山、石川、沖縄の各地からです。玄土社ならではの書の展開をごらん下さい。今回も、次のようなお話の時間を設けました。参加をお待ちしております。

テーマ 「いま話題の拓本」(玄土社主宰 表 立雲) 日時・会場 三月十七日(日)十四時～十五時 講義室 入場無料

連絡先 金沢市本多町一 七 一五

☎〇七六一 二六三 〇一二二

玄土社主宰 表 立雲 理事長 松村知春

金沢美術工芸大学教員作品展 壁面その表現

三月二十一日(木・祝)～二十六日(火)

(第7展示室)

平成十一年度の「工芸部門」に続き、広く皆様にご覧いただければ幸いです。

出品予定者(本学専任教員) 十三名

浅野 隆 五十嵐嘉晴 岩田 崇 大谷正幸

川本敦久 城崎英明 久世建一 酒井和平

坂本英之 仁志出龍司 真鍋淳朗 村井光謙

保井亜弓

入場無料

連絡先 金沢市小立野五 一一 一

☎〇七六一 二六二 三三三二

第26回日本海造型展

三月二十一日(木・祝)～二十六日(火)

(第8・9展示室)

日本海造型会議の十九名が、自己表現の可能性を追求し、絵画、彫刻、デザイン、映像、建築、書、造形、漆、陶、ファイバー等の意欲作を発表します。既成のジャンルを超え、交流する中で、新しい北陸の文化の醸成に努めようとするものです。今回はテーマを「衝」とし、一室触れることの出来る作品もあります。

入場料

一般六〇〇円 大高生四〇〇円 中小生二〇〇円

当館友の会員は会員証提示により各一〇〇円引

連絡先 金沢市山科一 一四 四〇 三井泰子

☎〇七六一 二四一 二七七九

輪華「花器」 昭和62年 当館蔵



企画展 TOPIC

大樋長左衛門の作陶世界 その一

大樋陶芸の世界は、日展や日本現代工芸美術展などに発表してきた展覧会出品のもの、伝統を受け継ぐ茶碗・水指・花入などの茶陶類、そして陶額や陶壁といった建築とのかかわりを持つ作品の、三つに大きく分けることができます。この中で、陶芸作家として大成し、日本芸術院会員となるまでの道のりをたどるには、日展出品作品の系譜を見ることが不可欠です。

初入選は、昭和二十五年第六回展での「陶器双魚置物」で、この後は「陶彫鶴伏香炉」(二十六年)「陶彫金魚伏香炉」(二十七年)、「語る 臍置物」(三十年)のように主題をそのままモデリングした作品が続きます。こうした作風は東京美術学校で鍍金を学んだ作者の動物のフォルムに対する関心の強さと、対象を活写する力量の高さを早くも感じさせてくれます。

その流れは次に、壺などの既成の形体に動物を主題にダイナミックな陶彫技法を用いた「鶏緑釉壺」(三十二年特選北斗賞)や「黄釉猫壺」(三十四年)に発展します。こうした作風を押し進め、彫刻的造形作品とでも言うべきスタイルとなったのが、「鉄地灰釉孤瓶」(三十九年)や「緑釉曲花器」(四十二年)でしょう。作者は早くから鳥や魚を好んで主題としています。が、四十年代後半からは、文様としては引つ掻きで簡略かつ瀟洒なものとし、また壺

などの口縁部を飾る突起群の一つとして、形体をいっそうシンプルにしたものを置くようになります。この口縁部飾りには他の動物やトランプ文など、多くの種類が用意されており、見る者を楽しませてくれます。この突起飾りを持つグループの代表作は、「歩いた道花器」(五十七年文部大臣賞)で、胴部をゆったりと曲線とした花器の独特のたおやかさと、口縁部

に置いた二つの動物の飾りは、作者自身の長い道のりをたどり、そしてまた意を決して歩み出すかのような心象風景にも見えるものとなっています。

またこの突起飾りシリーズには、宋代の柿天目釉を思わせる独特の鉄釉と清楚な白泥象嵌による三鳥手を組み合わせたものも多くあります。その三鳥手を用いて高く評価を得た作品が、「峙つ 花三鳥飾壺」(六十年)で、翌年に日本芸術院賞を受賞する際の受賞対象作品となりました。

近年は、あえて器体をわずかにくぼませるだけで、人物造形に表現した「餡釉大黒天花器」(平成十一年)や「が側面に勢いよく大きく刻まれた「達磨花器」(十一年)など、江戸後期の画僧仙厓の有名な「の墨画にも通じるかのような、洒脱な趣に満ちたもの」となっています。

以上、日展作品だけでも、多彩な技法や工夫を凝らした形体の作品を見ることができ、大樋陶芸の豊かな広がりや、ぜひ展示室でご覧いただければ幸いです。

(寺尾健一 学芸専門員)

「日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界」展
四月二十五日(木)～五月十九日(日)

三月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
3/2(土)	土曜講座	保存のはなし	講義室
3/3(日)	CDコンサート	バッハのコンサート	ホール
3/9(土)	土曜講座	J.S.バッハ カンタータ第22番 第23番(約40分)	講義室
3/10(日)	月例映画会	不思議な絵の世界 5	講義室
3/16(土)	土曜講座	柿右衛門 にこしで(29分) 小鹿田焼(34分)	ホール
3/17(日)	月例映画会	本朝画人伝 24 岩佐又兵衛	講義室
3/24(日)	月例映画会	日本刀 宮入昭平(25分) 奥会津の木地師 福島県田島町針生(25分) 法隆寺(23分) 東大寺大仏殿 昭和大修理(25分)	ホール

今月の全館休館日は三月二十九日(金)～三十一日(日)です。

各地の展覧会

三月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
 没後30周年 松永耳庵コレクション展 3/24まで
 東京国立博物館(東京都台東区・〇三三三八三二一一)
 森万里子ピュアラント 3/24まで
 東京都現代美術館(東京都江東区・〇三三五四五四一一)
 生誕100年記念 荻須高德展 3/24まで
 富山県立近代美術館(富山市・〇七六四二二七一)
 日本のなるもの 書くこと描くこと 3/24まで
 岐阜県美術館(岐阜市・〇五八二七一)
 風の画家 中島潔の世界展 日本のごころ 故郷のごころ 3/31まで
 滋賀県立近代美術館(大津市・〇七七五四三二二一一)
 没後五百年「雪舟」 3/12、4/7
 京都国立博物館(京都市東山区・〇七五五四一一二五二)

次回の展覧会

特集 春の優品展 (前田育徳会展示室)
 (第2展示室)
 四月一日(月)～二十一日(日)



竜の八ナ唄

庄田常章 昭和21年(1946)～

昭和57年 1982

第2回浅井忠記念賞展

縦227.5 横181.5(cm)

作者は人間の顔を画面いっぱいにくローズアップし、浮世絵の大首絵を彷彿とさせる、ユーモアと諧謔とが入り混ざった作品を描き続けています。この「竜の八ナ唄」は作者にとつて大きな転換点をなすもので、本作を境にスタイルはより洗練され、色彩もカラフルで大胆な方向へと進んでいきました。ここでは数種類の均一な線を用いて、コミック調に顔を描いています。そして色彩もほぼ同系色のパリエーションで、一見平板で淡泊な画面と感じなくもないのですが、しかし、不思議と奥行き感が表現され、透明な空気が、人をあざ笑うかのようなこの男を包んでいます。ちよつと視点をずらしてとらえた顔を、だまし絵的に線を絡ませて合成し、豊かな表情と動きを生んでいるのです。

タイトルの「竜の八ナ唄」とは、「白昼に竜が現れたらこんな感じだろう」と思つて付けたとのこと。庄田常章氏は昭和二十一年(一九四六)金沢市に生まれ、三年間留学し、四十六年(一九七一)に同大を卒業。日本現代美術展、国際美術展、シエル美術賞展等に出品、そしてほぼ毎年個展とグループ展を開くなど、精力的に活動を続けています。近年では韓国やペルーにおいて展覧会を開催し、平成九年(一九九七)から翌十年にかけては、文化庁芸術家在外派遣特別研修員として南米・サンパウロ・リマにて研修を積みまし。石川の戦後世代にあつて、最も注目される画家の一人といえます。

ミュージアムショップ通信

三月一日(金)より受付開始!!
新年度友の会会員募集

募集定員 二、〇〇〇名(定員に達し次第締切)
 会費 一、五〇〇円(年額)

受付場所 当館図書閲覧室
 受付時間 休館日を除く午前九時三十分
 ～午後四時三十分

郵便でのお申し込みの場合

ご希望の方は郵便振替をご利用下さい。

詳細は『美術館だより』第二〇号をご覧ください。
 会員証は『美術館だより』とともに三月末頃からお送りいたします。

郵便振替口座 00700 7 46490
 加入者名 石川県立美術館友の会

会員の特典

当館主催展覧会
 入場料の割引
 『石川県立美術館だより』を毎月郵送

お問い合わせは当館普及課友の会係まで。

新年度会員証
 時絵菊慈重図葉籠箱
 (部分)江戸時代



見本

休館日

三月二十九日(金)～三十一日(日)

石川県立美術館だより

第二二二二号 平成十四年三月一日発行
 〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号
 TEL 〇七六(二三一)七五八〇
 FAX 〇七六(二二四)九五五〇